

近代社会における大相撲力士の身体表象：
覇権性、男性性、〈日本〉性を巡る権力関係

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2021-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川野, 佐江子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4508

近代社会における大相撲力士の身体表象 — 覇権性、男性性、〈日本〉性を巡る権力関係 —

学芸学部 化粧ファッション学科 川野 佐江子

【研究目的】

本研究の目的は、公益財団法人日本相撲協会に所属する力士たちが、現代社会においてどのように表象されてきたのかを調査し、そのことから「大相撲の力士」に表れる「覇権的男性性」をあぶり出すと同時に、その覇権性にまつわる〈日本〉らしさの表象の有り様について考察することである。コンネルの示した男性性理論モデルは、「覇権的」「従属的」「共犯的」「周縁的」という4つの男性性モデルの関係性を示し、そこに権力構造があることを提示した。このコンネルモデルを援用し、番付という階層、〈日本〉らしさという言説を、大相撲における権力構造として捉え、現代社会において、力士がどのような権力関係の中に表象されてきたのかを考察する。

【研究の背景】

これまで筆者は、大相撲における男性性の表象について、戦後の大相撲の人気力士たちはメディアの発達とともにそのメディアへの露出が多くなることで、一般の男性にとって「男の中の男」としての代替表象として消費されていったことを論じてきた。その意味で、力士の表象研究は、コンネルの「覇権的男性性」概念で検討が可能である。ただし、では単純に力士は「覇権的男性性」なのかと言え、相撲界や力士が一般社会と隔絶されてきた歴史を鑑みれば、むしろ「周縁的男性性」として分析することも可能である。

また、横綱の柏戸と大鵬の比較検討研究で、彼らの表象に関わるキーワードには「男らしさ」の他に、大鵬の出自を巡る「日本人」というワードが見え隠れしていることが重要であることに気がついた。大相撲の表象を考える上で、「日本の伝統」「日本の様式美」「非西欧的身体」など、より「日本的である」ことが強調される中で、近年の海外出身力士たちの増加やそのことにまつわる課題や問題がメディアで取り上げられている状況を踏まえれば、〈日本〉という現代日本における覇権的価値観が強調されるベクトルも力士の身体表象の考察から除外するわけにはいかない。

【研究方法】

以上のような目的と背景から、調査は、NHK アーカイブス学術利用研究から戦後のNHK相撲番組と相撲専門雑誌『相撲』（ベースボール・マガジン社）を中心にその言説と画像分析を行う。その中から特に、外国出身力士の表象を抽出し、その表象にはどのような言説が伴いどのような映像・画像が使用されているのか、を調査し、「〈日本〉らしさ」という軸で考察する。

【結果と考察】

後世になって、大横綱と称されることになる大鵬の出自が“公然の秘密”だった1960年代は高見山というハワイ出身力士が誕生し、70年代の人気力士となっていく。堀の深い顔立ち、ウェーブのかかった鬘、片言の日本語、大きな体、褐色の肌、明るく陽気、そういう「常夏の島からやってきた外国人」、「アメリカのポップさ」を表象された力士の身体は、続く小錦、曙、武蔵丸と引き継がれる。2000年代になると、北米大陸やヨーロッパ出身の「白人」力士が登場し、近年はモンゴル出身の力士たちの増加と活躍がめざましい。とりわけモンゴル出身力士の活躍は、遊牧民族の伝統としてのモンゴル相撲の技に着目され、農耕と結びつく〈日本〉の相撲との技の違いが強調されて表象される。それは単なる技の差だけでなく、“経済後進国からやってきた素朴かつ粗野な若者群像”として定型化させられ、〈日本〉の神事を前提とした大相撲の「品格」との不適合問題へとすり替えられ、大相撲の頂点に立つ横綱という存在を、より〈日本〉的覇権的男性性として表象させることになった。

これらのことから、力士の表象には、番付というヒエラルキーの他、戦後の高学歴化を背景とした学生相撲出身者と「中卒たたき上げ」の対峙構図、〈日本人〉をより強調させるための「日本出身力士」という用語、メディア化社会による力士の肉体への注目、家父長制度的な相撲部屋制度など、多様な権力関係を発見するための要素が存在することが明らかになった。